

り世話になったりして、書家として成功し、ついに川村驥山という号を話になったりして、書家として成功し、ついに川村驥山という号を小室屈山という学者から受けます。驥山というのは「論言」の中に出てくる一日に千里を走る名馬のことです。書家として、どんな困難にも負けずに走りぬいてほしいという願いがこめられていました。そのとおりに驥山は、その後も書道を極めると同時に書道の発展にも努めました。驥山の功績は書きつくせません。

驥山のそばにはいつでも彼を支えてくれる家族や人たちがいました。それは、驥山が書の道を純粹にきわめようとしたからにちがいありません。書で人をだましたり、お金をもうけようとしたりしなかったからだだと思います。

私は、この「天馬のように走れ」を読んで書に少し興味を持ちました。これから書を見るとときには、そこにどんな想いがこめられているのかしっかりと感じ取るように見たいと思います。

余命1ヶ月の花嫁

中川根中学校一年
藤原結衣



私がこの本を選んだ理由は、以前テレビでこの話を見て、とても感動したからです。

この本の中で一番心に残っている場面は、病室で太郎さんが「毎日なにしてるの?」と

ハードル

中川根中学校二年
松本菜都子



皆さんは「真実」についてどう考えますか。私はこう考えます。「うそがなく本当のこと」と。でも今の世の中に「真実」という言葉がぶつけるとどうでしょうか。偽装・偽造問題など真実とはかけ離れたことばかりです。この本も大人達がふたをした「真実」をもう一度自分達の手で開けよう」と「正義と勇気」だけをただ一つの武器として大人達と戦います。

麗音は友達、北野のおばあちゃんの言葉にすぐわれ心の輝きを取り戻しました。その言葉は今の世の中そして私たちにも必要な言葉でした。

「天知る、地知る、我知る」

私はこの言葉がとても心にひびきました。自分が何か悪いことをしたとき、この三つが知っているということですか。そして一番知っているのは自分の心だということですか。たしかに失敗や過ちをしてしまった時一番覚えているのは自分です。そしてこの先思い出したくもないけれどなぜか一番よく思い出してしまいます。本当に当たり前の事ですが私は改めてこのことに気付かされました。そして今の世の中に一番必要な言葉なんじゃないのかなと思います。北野のおばあちゃんは、麗音に今の人間達が忘れてしまっている本場に当たり前のことを教えてくれんだと思いました。だから私はこれか

いう質問に、千恵さんが「生きてる」と答えるところですか。なぜかという、千恵さんが自分のブログに「みなさんに明日が来ることは奇跡です。それを知っているだけで、日常は幸せなことで溢れています」という言葉を見て、生きられる喜びを改めて考えさせられると思ったからです。たった「生きてる」の四字文字でも、その中に千恵さんの思いがたくさんつまっていると思うし、千恵さん自身もその言葉に對し喜びを感じているのではないかと思います。私がこの言葉に千恵さんの思いがギュッとつまっていると思った理由は他にもあります。それは写真です。写真に写っている千恵さんは、いつでも幸せそうです。自分ががんであと少しの命であるにもかかわらず、いつも前向きで「生きてる」ことをとても幸せに感じている千恵さんは、すごくすばらしく強い人だと思います。そして私は千恵さんがそんな風に生きることができたのは、千恵さんの努力や前向きな姿勢はもちろん、いろいろな人の支えもあったからだだと思います。例えば、千恵さんが「ウエディングドレスが着たい」と言ったとき、もう時間がなかったので、無理を言って一週間以内に式を挙げられる所を友人が探してくれたり、千恵さんのためにいろいろな行動をおこしてくれたからです。

みんなが千恵さんにそこまで優しくしてくれたのは、千恵さんは友達想いでいつもみんなのことを気にかけていたからです。自分のことも大変なのにみんなに「ちゃんとねむれてる?」「ごはん、食べてる?」などのちよつとした気づかいが、やがて大きな力になって千恵さんに返ってきたのだと思います。

そして何よりも大きな支えになったのは、父・貞土さんと恋人・太郎さんです。貞土さんから自分の心にはうそをつきたくないと思えました。そしてまた、麗音は大切な人との別れを向かえました。自分の父親、今まで何があっても見方でいてくれた良平や光達との別れでした。麗音はお父さんと固い約束をしました。それは一年後必ず会おうということでした。そしてそれまで、自分の母親と弟の佑樹を麗音が守っていくということでした。

お父さんとの約束をしたことによって麗音はまた一つ強くなり、そして大人になったんだと思いました。麗音のお母さんの実家に引越した所は以前の所とは違ってとても静かな所でした。麗音達三人は大自然の中で伸び伸びと過ごしました。ですが麗音は部活内でいじめにあっていました。髪の色が違うから、生意気だからなどといじめが続けました。私も何度か友達から無視されたことなどがありました。でもその時は、先生がちゃんと対応してくださいました。でも、少し前まではニュースでいじめによる自殺や、掲示板へ悪口の書き込みがひんぱんに報道してました。特に、自殺の面ではどうして先生が助けてあげなかったのか、どうして勇気を出して友達と一緒に戦ってあげなかったのかとすごく強く思いました。私もやっと今の歳になっていじめは何の意味もないと思えるようになりました。麗音は言っています。

「いじめはけんかじゃないんだ。想像力も思考力もない、心をなくしたやつらが相手なんだ」と。

私の父の話を聞くと、昔はやったらやり返すというのが当たり前だったといえます。今のいじめは昔と違ってそんなことはできません。暴力で解決するいじめではなく

んはいつも千恵さんのそばにいて千恵さんを見守っていました。太郎さんは千恵さんと楽しい思い出を作ったり、千恵さんの相談相手になってくれていました。千恵さんの飲んでいる薬や、使っている酸素ボンベの使用量なども一番良く知っていて、みんなからたよりにされていました。貞土さんは千恵さんの背中をいつも手でさすってあげていました。

そんな人たちが周りにいたから、千恵さんも幸せだったんじゃないかなあと思います。実際にそれを千恵さんも感じていて「生きてるって奇跡だよ。いろんな人に支えられて生きてるんだよね」という言葉を残しています。

私達もそうですが、ふつうに生きています。自分は「ふつう」ではなくって初めているいるな人に支えられているということが分かるのではないかと思います。私もこういうことを聞いて、確かにいるいるな人に支えられて生きているんだなあと改めて感じました。

千恵さんありがとう。

余命1ヶ月の花嫁
TBSイブニング5著

イベントコンパニオンをしていた長島千恵さんは23歳の秋、左胸にしこりを発見、乳がんの診断をうけました。乳房切除の手術により完治したと思われたある日、胸膜、肺、骨にガンが転移しているのが判明。筆舌に尽くしがたい痛みと闘うことに。最後まで人を愛し、人に愛された24年の人生を生き抜いた長島千恵さんからのラスト・メッセージ。

つけてそれをいいように使い、いじめられている方から手を出せないようにしてしまっているからです。掲示板への書き込みやメールのやりとりをひんぱんに行うようになってから自分の身に何が起こっているのか分からないのがとても怖いです。

いじめから救ってくれる大人達もいれば、人ごとだと思いいじめを隠す大人達もいます。麗音は、ある日いじめによって大怪我を負ってしまいます。ですがそれを大人達は隠しました。周りの目ばかりを気にしている大人達は事故と決めつけ真実を隠しました。私はそれが許せませんでした。結局自分か一番大事なんだと、大人達はどうしてこうなんだろうと思いました。いじめに限らず今の世の中には真実を隠していることがたくさんあるように思います。私は大人になつたら、真実にふたをしない大人になりたいと心から思いました。麗音の真実を知ってもらおうと良平や、光、佑樹、友達が立ち上がりました。何度も話し合いを重ね、やっと真実を知ってもらえるようになりました。みんな、正義と勇気を持ち自分のハードルを越えていきました。一つのハードルを越えるのは簡単なものではないんだということを知りました。

私たち子供は、まだまだたくさんつらいことや苦しいことがあると思います。そんな時は、自分の弱さだけに負けないようにしたいです。そして、真実にふたをしないよう自分をしっかりとってこれからの人生を過ごしていきたいと思えます。この本は私にとっても今の世の中にとっても大切なこと、忘れかけていたことを教えてくれたのではないのでしょうか。真実という言葉は、こんなにも大きく人を左右していくということを知りました。絶対に自分だけに嘘は

そしてとうとう千恵さんは二十四年と六ヶ月という生涯を閉じました。そしてお葬儀でも、千恵さんはいろいろな人に支えられていたということが分かります。それは予想していた焼香の時間を大幅に延長しなくてはならないくらいたくさんの方が来たからです。そしてどの人からも「もう少しやべりたかった…」という声が聞こえてきました。千恵さんは本当にがんばってきたと思います。いつも前向きに「頑張る、頑張る」「もう泣かないよ」と言って本当に頑張っているし、泣きませんでした。だから、私は千恵さんに「お疲れさまでした」と言ってあげたいです。

私も千恵さんと同じで、がんばって自分には関係のないことだと考えていました。でも、それは違うと改めて考えさせられました。確かに分かりにくいことであると思います。でも、だからこそしっかりとその病気のことを知り、自分の健康管理をしてほしいし、その病気のことを聞いて人事だと思わずに、ちゃんと自分のこととして受け取ってほしいと思います。それが千恵さんから私達へのメッセージなのでから。

ハードル
青木和雄著

「いじめの事実はありませんー」。バスケット部のエース・有沢麗音が、学校の非常階段から落ちた！事件か、事故か。早々に結論を出した学校に対して生徒達は立ち上った。必要なのは、自分の心で感じて、信念で行動すること。そう気づいた時、子どもたちは何を起こしたのか。自分たちの「正義と勇気」を、ただ一つの武器にして。

つかないで、正義と勇気をもって生きていきたいと思えました。

少女と風船爆弾

中川根中学校三年
山下莉奈



今まで私は、夏休みに戦争の本を読んできました。八月になると、広島、長崎に原爆投下された日、終戦の日と続き、テレビや、新聞で戦争の話題が多くなります。これまでに読んだ本や、戦争のドラマ、映画を見ましたが、どれも戦争を知らない私でも涙がでしてしまうほど、悲しいものばかりでした。大切なものをなくし、人を苦しめる戦争に興味があったのでしょうか。六十年以上たった今でもたくさんの人を、まだ悲しめています。この本に出てくる少女は、十八才になった

少女と風船爆弾
日台愛子著

日本は戦時中、風船にまで爆弾をとりつけて、アメリカ本土への攻撃を試みようとしていました。この物語は戦争末期、軍需工場にかりだされた女子学生たちが、昼も夜もない過酷な労働の中、みずからの手で1枚1枚貼り合わせていった紙風船と、爆弾という殺りく兵器、そして多感な少女たちの心情を描いた記録です。